

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520660

研究課題名(和文) 韻律指導とリスニングストラテジー指導の併用型指導の有効性：他指導法との比較・検証

研究課題名(英文) The effectiveness of interactive teaching methods in EFL classrooms: a comparison with bottom-up and top-down methods.

## 研究代表者

折井 麻美子 (Orii-Akita, Mamiko)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：30334585

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は発音指導(韻律指導)と聴解指導を併用する「統合的指導」の教育効果の検証を目的とし、大学中級授業3クラスにおいて、同一の自主開発リスニング教材を使用して実験授業を2年間にわたり実施した[6か月間(90分×20回)]。聴解能力の測定はWeb客観試験(WeTEC)により3回実施(授業直前・直後・2か月後)実施した。3種類の指導は、音素指導だけのクラス 聴解指導だけのクラス(リスニングストラテジーを指導) 韻律と聴解指導の併用(統合)指導のクラスであった。その結果統合指導クラスにおいて(両年度共に)他の2クラスよりもスコアの平均値に有意な上昇がみられ、統合指導の有効性が示された結果となった。

研究成果の概要(英文)：This study evaluated the effectiveness of three teaching methods that employ three models of listening comprehension; bottom-up, top-down, and interactive; in the context of teaching English listening comprehension to Japanese university students. The study involved twenty 90-minute sessions with 3 experimental groups (bottom-up, BG; top-down, TG; interactive, IG) that underwent customized listening training using a self-developed textbook/CD. The BG engaged in dictation activities; TG received explicit instruction on listening strategies; IG, on strategies and prosody training. For speaking activities, the BG & TG presented dialogues, while the IG engaged in prosody instruction/practice, followed by shadowing activity. Listening tests were administered before, immediately after, and two months after the 20 sessions. Results show that the IG outperformed the other two groups, indicating the interactive model's superiority in improving EFL learners' listening comprehension ability.

研究分野：英語教育

キーワード：英語教育 音声指導 発音指導 聴解指導 英語教育 第二言語習得

## 1. 研究開始当初の背景

### 1.1 音声情報処理の3モデル

どのようなプロセスで音声の流れが捉えられ意味把握されるか、3つのモデルが提案されてきた。まず、Bottom-up 型が提案され (Carrel, 1983, 1988; Rost, 1990) 最少単位の音素から理解を開始し、単語・句・文へ音声/文法情報を積み上げていくものであるとした。その後、既知の情報や背景的知識を活用して内容を積極的に予測する Top-down 型が音声処理過程のモデルとして提唱された (Vandergrift, 1997; Ross, 1975; O'Malley & Chamot, 1990 等)。さらに、上記2モデルの両方を活用する併用型 (O'Malley & Chamot, 1990) が提唱され、現在に至っている。

### 1.2 音声・聴解指導と教育方法研究の現状と問題点

ここで、上記3モデルに基づいた指導法及びその形態・特徴・研究の現状を紹介する。

#### Bottom-up モデルに基づく指導

ディクテーション(伝統的聴解指導方法)や音素指導(明示的な音声指導の中心的役割)、韻律指導(重要性は認識されているが教育現場では行われることが少ない)などがあげられる。

#### Top-down モデルに基づく指導

Listening strategy を明示的に指導する事が、学習者の top-down 処理を助け聴解能力の向上に効果がある可能性が指摘されている (O'Malley et al., 1989; Vandergrift, 1997)。背景知識の活用や各種推測を行うこと、大意把握から具体情報へと聞き取りを進める練習をするものであるが、趣旨に基づく問題集は多数あるものの (大学生以上対象: Bean, 2004; 村川 2006; 小野田 & Cooker 2011 等)、明示的に指導できる配慮のあるものは多くない。

## Interactive モデル(併用型)に基づく指導 <本研究における主たる検証対象モデル>

言語は異なるレベルで同時進行的に処理されるものであり、音韻・統語的レベル (Bottom-up 処理) から、意味・語用論的レベル (Top-down 処理) まで及び、優れた学習者は Bottom-up, Top-down 両方の処理を行っているのに対し、そうではない学習者は Bottom-up 型処理のみ使用していることが多いという研究結果が報告されている。しかし、本モデルの研究の現状と問題点としては、以下の4点があげられる: (i) 樋口 (1998)・池田 (2002) らが併用型指導を推奨するもシラバスなどの詳細は不明である; (ii) 既存の教科書も実証データが欠けている (石田他 (2000); Cleary et al. (2007)・浅野 (2008) ほか、長谷川 (2002) は自主開発教材でシラバス提示するも教育効果の検証はない; また実証データのあるものについても、(iii) 鈴木 (2009) は短期間 (6 回) の実験授業でストラテジー指導 (実質的には併用型の指導) を行ったが、統制群がなく delayed posttest もなかった; (iv) 小笠原 (2001) は数少ない実証研究を行ったが統制群と実験群で使用教科書が異なりインプットの違いによる影響が否定できず、また delayed posttest もなかった。

## 2. 研究の目的

本研究では、併用型の音声教育の有効性の検証および効果的な教材の開発を目指した。

「韻律指導」を明示的に行う Bottom-up 型指導と Listening strategy を明示的に指導する Top-down 型指導を組み合わせた **Interactive 型(併用型)の音声・聴解教育の効果を測定**することを目的とした。検証実験として、**6 か月間の実験授業**を大学中級授業で行い、<ディクテーション中心の

Bottom-up 型指導 > と < Listening strategy 指導を行う Top-down 型指導 > など**複数指導法との比較によりその教育効果を検証**した。さらに、韻律指導及び Listening strategy 指導を効果的に施す自主開発 **リスニング教材の開発を行った**。

### 3. 研究の方法

#### <初年度実験計画>

(1) **被験者**： 早稲田大学 教育学部 英語コミュニケーション中級(習熟度別)クラス

(2) **実験群**：

伝統的 **Bottom-up 型**(dictation)群

**Top-down 型** (listening strategy 指導)群

**Interactive 型** [Top-down(strategy 指導) &

Bottom-up (明示的韻律指導)の**併用**]群

(3) **被験者**：約 20～30 名ずつ

(4) **実験授業計画**：

各群**共通**の指導内容：

同一教材を使用して同一回数 C D 音声を流す。ほぼ同じ長さの会話練習。

各群**特有**の指導内容：

(i) Bottom-up 群：Bottom-up 指導として伝統的なディクテーションで**暗示的に**音変化に注目させると共に文化・文法・語彙的な内容に焦点。1 段落程度の会話練習

(ii) Top-down 群：必要情報**スキミング**、内容・意図・展開等の予測、論理展開/視覚情報の活用を板書等用いて**明示的に**指導し該当問題を解かせ解説。1 段落分会話練習

(iii) Interactive 群：(ii)の内容 + **明示的**韻律指導(リス m/弱形/連結/同化等)。1 段落**発音**練習

(5) **データ収集**：

時期・回数：3 回

( 受講直前の平成 24 年 4 月初旬 受講直後の 11 月末 2 か月後の翌 2 月初旬)

内容：Web-based Test for English

Communication (WeTEC , (株)CASEC 提供)

(6) **データ分析**：リスニング問題[Section

3(大意把握)と Section 4(具体情報聞き取り)] 計 45 問分

#### <2 年目での修正実験>

H24 年度実験群に加え、併用型において、短文の発音練習に加えて、シャドーイングも行った上で、データ収集を実施した。

#### <3 年目以降の研究内容>

データの分析および聴解指導と発音指導の指導手引きの作成(書籍での出版を計画していたが、英語教員自身の聴解・発音能力の向上が急務であると判断したことから、課題の再構築を計画し、平成 26 年 4 月より研究課題を開始した。

### 4. 研究成果

実験授業・データ収集・分析を行い以下の成果を得た。聴解能力において、他の二つの指導法に比べ、併用型のスコアの平均値に有意な上昇がみられ、その有効性が示された結果となった。

検証の結果を以下の通り発表した。(i) 初期的な分析結果を日本語と英語論文にまとめた(論文[1][2])のちに、1 年間のデータ収集の結果を(ii) 国際学会において口頭発表し (New Sounds 2013, Montreal, 2013, May)、(iii)その内容をまとめた英語論文を発表した(論文[3])。また、(iv) 併用指導の有効性を情報処理過程の観点から検証した英語論文を発表した他(論文[4])、中学校の英語教員の音声指導の現状調査を実施した結果を日本語論文として発表した(論文[5])。

なお、上記の研究成果を専門書にまとめるという当初の予定を変更し、教員研修オンラインプラットフォーム課題の構築を目指すこととした(基盤 B 課題番号:15H03228 として採択)。

## 5. 主な発表論文等

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授  
研究者番号：30334585

〔雑誌論文〕(計 5 件)

- (1) 大賀京子・折井(秋田)麻美子 (2012)  
『リスニングストラテジー指導と英語音変化指導併用の試み』北海道教育大学紀要. 人文科学・社会科学編. 第 62 巻 第 2 号, 75-88. (共著・査読無)
- (2) Orii-Akita, M. and Oga, K. (2012). A comparison of three different methods of teaching listening comprehension. *Journal of EPSJ (Eigo Onseigaku)* The English Phonetic Society of Japan, 147-158. (共著・査読付)
- (3) Orii-Akita, Mamiko. (2014). The effectiveness of interactive teaching methods in EFL classrooms: a comparison with bottom-up and top-down methods. *Concordia Working Papers in Applied Linguistics*, vol. 5, 463-477. (単著・査読付)
- (4) Orii-Akita, Mamiko. (2014). Human cognitive processing and the interactive teaching method in EFL listening comprehension. *Gakujutsu Kenkyu, English Language and Literature*, Waseda University, vol. 62, 1-16. (単著・査読無)
- (5) 折井麻美子 「英語音声教員研修の必要性：発音指導に関する中学校教員の意識調査から」(2014)『学術研究』早稲田大学教育・総合科学学術院教育会, 第 63 巻, 203-222.

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

折井 麻美子 (Orii-Akita, Mamiko)